特別養護老人ホームみちのく荘

まるめろ通信

人、ひとりひとりの心地良さ

東日本大震災特集号

[まるめろ通信/第81号]
発行日／2011年 5月29日
発　行／青森社会福祉振興団
みちのく荘 0175(23)1600
みちのく金谷デイ 0175(23)0771
城ヶ沢みちのく荘 0175(24)3163
脇野沢いこいの里 0175(31)5611
Eメール／marumelo@michinokuso.or.jp

被災に遭った高齢者福祉施設を訪ねて

大船渡市の特別養護老人ホーム「さんりくの園」天井まで津波が襲い、津波が去った跡は施設のものか、流されてきたものかわからないくらいたくさんの物品が散乱している。

平成23年3月11日14時46分に発生したマグニチュード9.0の地震による大津波は、東北地方の太平洋沿岸部を中心とした地域に壊滅的な被害をもたらしました。

4月1日から3日にかけて行われた、公益社団法人全国老人福祉施設協議会による被災施設調査に同行した、当施設の中山辰巳園長から、被災地と被災施設の現状、そして今後必要な支援について話を聞きました。

Q1 岩手県の施設はどのような状態でしたか？

大船渡市の特別養護老人ホーム「さんりくの園」は、壊滅的な状態でした。地震発生から30分もたたないうちに、津波がものすごい勢いで襲ってきたそうです。

鉄の防火扉もなぎ倒されていました。居室やホールだった場所の床には、津波に壊され原形をとどめていないおびただしい量のガレキが散乱していました。

職員の方々は、思い出の品がひとつでも残っていないかと、手作業で懸命に片付けをしていました。天井近くの壁には水の跡が残っていて、そこまで津波が押し寄せたと聞き私は言葉を失いました。

施設の壁の至るところに、赤い×印が付けられ、その場所で遺体が発見されたことを示していました。

Q2 入居の利用者、職員の方々の安否は？

入居者の皆さんの半数が命を落とされ、職員は11人が行方不明だそうです。

ここの施設長は、流木につかまってなんとか助かったそうで、話を聞くことができました。「入居者を避難させようと、施設の外で車イスを押しているときに波にさらわれました。駐車場の車が流されて、次々と自分に迫ってきたのが、とても怖かった。一緒に流された兄のおでこに角材が直撃し即死したのを隣の位置にいて目の当たりにしました。」と、話していました。

生き残った職員のなかには、内陸部の福祉施設への就職を決断し辞める人もいて、法人そのものが崩壊の危機にさらされていました。

Q3 施設周辺の地域の様子はどうでしたか？

外は一面、どこから来たのか、誰のものなのか判らない壊れた生活物品で溢れていました。津波に押し流されて、屋根のうえに上がってしまったままの車や金庫も至る処に転がっていました。

道路のガレキがようやく片付けられたと同時に、空き巣やどろぼうが現れだしましたが、警察も手が回らない状態だそうです。

廃品の片付けの際には所有権の問題、工作機械・ガソリン・人手など、必要なもの全てが不足し、照明や街灯も無いため、夜間は真っ暗な状態で撤去作業も思うようにはかどっていないそうです。

大船渡市から陸前高田市への移動中、車から見えるのは、廃品とガレキの山でした。建物が流され、その跡のコンクリート基礎の上に海水が溜まり、田んぼのようにみえる風景であり、見渡す限りの平地でした。

「さんりくの園」のユニットスペースで、たくさんの利用者が穏やかに生活していた場所。写真中央の赤い×印のところで、利用者の遺体が発見された。

かろうじて残っていた鉄筋コンクリートの建物も、4階まで津波により内部が破壊されていました。地中に埋まっていたはずの浄化槽タンクが、波にえぐられてむき出しになっていました。津波を免れた地域でも、強い地震の揺れでたくさんの家が傾き、道路を覆っていました。

陸前高田第一中学校は、遺体安置所になっていました。悲惨な現実を目の前にして、私は涙が止まりませんでした。

同行していただいた市の職員も、「指示を出す拠点を含めて、すべてが崩壊しているんです。この通り、街が全て無くなってしまった。基礎だけが残って…。」と、言葉を詰まらせていました。

Q4 避難所になっている施設では、どんなことがありましたか？

避難所になっている陸前高田市の特別養護老人ホーム「高寿園」では、避難している地元の高齢者が、廊下の隅で布団を被り、うずくまっていました。

長引く避難生活のストレスから、利用者同士で不満や苦情が出始めていて、職員がその板ばさみになり対応に苦労していました。

食事は1日に2回、オムツ交換は朝1回・夜1回しかできていませんでした。施設は残っていても、電気や水は使えないため、お風呂も入れず、週2回体を拭くのがやっとだそうです。

懸命に介護する職員自身も被災者です。避難生活を強いられている全ての方々が、心身ともに傷つき疲労しているということを、痛感しました。

迷彩服を着て車のナンバーを偽装した「にせ救助隊」が出没し、救援物資をだまし取られるという事件も起きていました。

他県ナンバーの不審車両も確認されていて、車で寝泊まりする人や避難所で生活する人を狙う、いわゆる「火事場どろぼう」も横行しています。

想像を絶する避難生活でした。それでも被災者の方々は、自分たちで治安を守ろうと、「自警団」のような組織づくりに取り組もうとしていました。

Q5 宮城県の施設はどのような状態でしたか？

仙台市若林区にある、特別養護老人ホーム「杜の里」でも、やはり全ての部屋や備品が津波の被害に遭っていました。床には、海水と油が混じった黒い汚泥が広がっていて、施設全体にドブのような異臭が立ち込めていました。

海水や汚泥をかぶった機材は、全て廃棄するしかない状態でした。入居者や職員は、近くの高速道路に駆け上がり、全員が一命を取りとめたそうです。

住む場所を失ってしまった入居者は、同じ法人が運営する秋保の特別養護老人ホームや、他の福祉施設へ避難しているとのことでした。職員も、それぞれの施設で雇用してもらっているので、この施設には施設長しか残っていませんでした。

施設長は、「避難したある入居者が『もう、こんなに怖いところで暮らしたくない。また施設を建てても、入居したくない。』とつぶやいていました。この場所での施設再建は、今は考えられません。」と、肩を落としていました。

Q6 被災地の方々が必要としているのは、どんな支援でしょうか？

今回の調査を通して、現在地に施設を再建させることは不可能だと思いました。

受け入れが可能な地域に、一刻も早く被災した高齢者が入居できる施設を整備することが必要だと思います。

仙台市若林区の特別養護老人ホーム『杜の里』。利用者の「終(つい)の棲家」であるはずだった部屋は、黒い汚泥で飲み込まれていた。

そして、不眠不休で過酷な労働をしている、被災地の介護職員の皆さんが切実に望んでいることは、交代で働くことができる介護職員の継続的な派遣態勢を整えることです。

また、被災施設の経営者たちは、法人が再建するまでの間、かけがえのない人財である、職員たちの雇用受け入れを強く希望しています。

みちのく荘からは、4月28日から5月6日までの日程で、岩手県大槌町にある施設「らふたぁヒルズ」へ、男性介護職員3名を派遣します。今後も全国老人福祉施設協議会を中心に、必要な支援を組織的・継続的に行っていかなければと考えています。

やさしい街づくりを応援しています。

エコ住宅・新築工事・リフォームなら
アフターと信頼の当社におまかせ！！
まつうらホーム
松浦一級建築設計事務所 (有)松浦建設
むつ市柳町4-12-25 TEL22-5809

三井住友海上火災保険代理店
㈱ほけんやの成田
安心 信頼 実績
お気軽にご相談ください
むつ市新町28-17
TEL 33-2880 FAX 33-2881

快適な環境づくりのお手伝い
○介護用品のレンタル・販売
(車いす・ベッド・リハビリ機器他)
○住宅改修
株式会社 シルバーサービス
〒035-0033 むつ市横迎町2-9-13
TEL 0175-22-9511

被災地支援手記

訪問介護ステーション管理者　野中　優

私たち、法人各事業所の職員3名は4月28日～5月6日の9日間、東日本大震災支援のため、岩手県大槌町の沿岸にある、特別養護老人ホーム「らふたぁヒルズ」へ災害派遣職員として行きました。

先方の職員の話を聞くと、震災直後、利用者・職員ともに施設内から、津波が町を飲み込んでいく様子を一部始終見ていたとのことでした。幸い施設自体が高台にあったため、津波の被害はなく、入居者も全員無事でしたが、被災された高齢者を受け入れたため、個室を2人で利用するなどの緊急措置がとられていました。

被災地派遣職員３名。
どんな状況でも対応できるよう経験豊富なメンバーを派遣。

職員の半数が住まいを失ったため、現在避難所から通っている人や、職場で寝泊りしながら勤務している人もいました。当日休みのため自宅にいた3名が津波に流され、ようやく遺体が見つかり、私たちが訪れた2日後に通夜が営まれた職員もいました。

震災当日以降、津波の被害により、道路がガレキで覆われたため、帰宅することもできなかったそうです。家族の安否も分からないまま施設に残り、5日間24時間連続の勤務を続けたとのことでした。同じ介護職として、その使命感には本当に頭が下がる思いでした。

私たちが現地を訪れた時は、既に電気・ガス・水道が復旧しており、職員も一時の混乱から抜け出し、施設内全体が落ち着きを取り戻しつつある状況でした。

そんな中、私たちが任された主な仕事は、夜勤帯の見回りと排泄介助でした。通常では3名の夜勤者を配置することになっていますが、「またいつ地震がくるのか?」、「地震がきたら少ない人数で対応できるのか?」という精神的な負担を軽減するため、6名が配置されていました。

夜勤帯でも震度3近くの余震が起きることもあり、その度に利用者は敏感に反応します。居室から大きな声を上げて職員を探し、「地震だ!大丈夫?大丈夫?」と不安を訴えられる場面もありました。やはり、今回の大地震や余震が続く状況の中、恐怖心やストレスが蓄積されていることを感じました。

今回、自分自身の心に焼きついた現地の光景は、沿岸のほとんどの建物は原形を保っておらず、船や車がいたるところのガレキの山の上に無残な姿で乗り上げられている悲惨な状況です。また、海から相当な距離離れた場所でも津波の被害を受けるなど、テレビで見たよりもはるかに凄まじい状況で、ただ言葉を失うばかりでした。

想像を絶する現実の中で利用者の生活を守るために、昼夜を問わず不自由な環境の中、必死に2ヵ月近く働き続けた仲間が居ることを強く心に感じ続けています。これから「長期間にわたる継続的な支援のあり方とは?」、「真に必要な支援とは何なのか?」を自分自身で考え続け、実践していきたいと思います。

3月11日、地震発生 その時、みちのく荘は…

東日本大震災により3月11日から12日にかけてむつ市全域が停電しました。

人や建物には被害がなかったものの停電により法人各事業所では、照明・暖房・給水がストップし、調理器具やトイレの使用ができなくなりました。

電気が復旧するまでの約2日間、当法人でどのように対応したのかを報告します。

○特養 みちのく荘 いこいの里

〈みちのく荘〉

●利用者の状態を確認後、水汲みに奔走(受水槽からの給水が停止のため、一部使用可能な水道を使用)。

●浴槽やポリバケツなどに水を溜め、トイレ用とした。

●夕食を早めにし、洗浄不要になるよう食器などにラップを巻き対応した。

〈いこいの里〉

●エアマット利用者を通常マットへ変更した。

●水とガスの使用が可能であったため、食事も若干の変更で対応できた。

●暖房対策としてペットボトルに、お湯を入れて湯たんぽの代用とした。

〈勤務体制〉

両施設ともに夜勤職員を増員し、利用者の安全確保に努めた。

特養みちのく荘…職員が何度も往復し、確保したトイレ用水。

○デイサービス

●地震発生時は、入浴終了後やおやつを食べている最中であったため、揺れが収まってから、通常時間より早めに利用者の帰宅を実施。

●12日は停電のため、十二林・金谷・城ヶ沢・脇野沢4ヵ所のデイサービスの営業を中止。

●13日以降は金谷デイサービスセンターでは、独り暮らしの方を対象とした限定営業や、金谷・中央デイの合同デイサービスを実施した。

●車の燃料不足により、送迎時間やルート変更などの工夫を行った。

○訪問介護

●地震当日は、時間変更を行い、当日予定分をすべて訪問し、訪問先から戻る際、安否確認を含め独居者宅の訪問を行った。

●食材を確保してほしいなど、利用者や家族のニーズを確認し対応した。

●車のガソリン確保が困難であったため、家族の理解と協力をもらい、予定変更などを行った。

○訪問入浴

●地震発生時、利用者宅に浴槽を持ち込み、入浴介助を行っていたところだった。お湯が大きく波打ち、床にこぼれそうになり、停電のためボイラーもシャワーも停止してしまった。

●利用者宅を訪問し、サービス中止の連絡をした。

●3月14日より稼動再開、ガソリン供給に不安定があったため、週2回の利用者は回数を減らしてもらうなど、最小限のサービス提供で対応した。

○訪問看護

●エアマット使用の利用者宅を訪問し、エアマットのエア止めの方法やエアが抜けている場合には布団を利用するなど、指導を行った。

●喀痰吸引実施者(気管切開者で自力で喀出困難な方)への訪問をし、喀出しやすい体位の指導、また、今後吸引器を購入する場合は充電式の吸引器購入を勧めた。

○居宅介護支援事業所 地域包括支援センター

●地震当日から翌日にかけて独り暮らしで家族が安否確認に行けない利用者宅を対象に訪問した。

●訪問時は暖房が使えず寒いため、ペットボトル湯たんぽによる保温を促した。

●震災の影響でデイサービスが使えなくなった利用者宅を訪問し、状態確認する。

●家族や近隣住民への見守りの働きかけやヘルパー利用など代替サービスの調整を行った。

十二林施設内にて地震対策本部を設置。停電状況や各事業所の情報収集、また、懐中電灯や乾電池、飲料水など備蓄品を1ヵ所に集め、即応処置をした。

○グループホーム

●リビングに居た利用者から「集まってここで寝たい。」との要望があり、利用者の不安な気持ちが伝わってきた。休みの職員もほとんどが集まり、利用者が落ち着くまで対応した。

○ケアハウス

●トイレ用水は風呂の残り湯で対応し、着衣を増やして暖をとるよう勧めた。

●夜間の見回りを1時間ごとに実施した。

●12日は、食堂にストーブを設置し、希望者は集まって暖を取ることにした。人が集まりはじめたため、身体を温めようとレクリエーションを開始。

○城ヶ沢みちのく荘

●飲料水やトイレ用水は、断水がなかったため問題はなかった。

●食事はガスでご飯を炊き、使い捨て用器で対応した。

●勤務体制は、夜勤職員1名増員し、利用者の「寒い」や「暗い」といった不安をなくすため、頻繁に巡回した。また、余震のたびに安全確認の声掛けをした。

●12日以降は、入浴回数を減らし、燃料不足を考慮し、家族送迎を依頼した。

まるめろ通信 発行延期の報告

東日本大震災にてお亡くなりになられた方々やご遺族の方々に心からお悔やみ申し上げます。また、被災者の皆さまには心からお見舞申し上げます。

まるめろ通信第81号は、当初3月27日に発行する予定でしたが、東日本大震災による甚大な被害状況を考慮し、まことに勝手ながら発行を延期させていただきました。

6月に第82号を発行、その後は通常通りの発行に戻りますので、今後ともご支援よろしくお願いいたします。

やさしい街づくりを応援しています。

この街と、生きていく。
あなたとまちとフェイスtoフェイス
Face to Face
青い森しんきん

水産物・青果物・食肉・冷凍食品等の卸売
有限会社 ニッショク
NISSYOKU
青森県むつ市大曲二丁目13-35
電話(0175) 22-7222
FAX(0175) 22-7081

下北文化会館
むつ市金谷一丁目10-1
TEL.0175-22-8411
FAX.0175-22-8414
http://shimobun.com
文化芸術はもちろんのこと、様々なシーンでのご利用に対応しております。
お気軽にお問合せください。